春の伊豆沼

渡り鳥が去ったこの時季、鳥たちを無事に見送ったという安堵感に包まれた伊豆沼は、１年で一番静かな時を迎えます。しかし、静かな中にも繁殖へ向けた生き物たちの動きが既に始まっています。

沼はヤナギの新芽の鮮やかな緑色に囲まれ、ホーホケキョというウグイスのさえずりが聞こえます。時々ホーホケで終わってしまう時もあります。鳴き始めたばかりで、まだきちんとさえずれないのです。その声をぐぜりと呼びます。

時々、バシャッ、バシャッという音が聞こえてきます。水際をよく見てください。コイやフナの産卵を見ることができます。彼らは浅瀬で植物の葉や根などに卵を産み付けます。気温の上がった日によく見ることができ、大きなコイやフナが体をくねらせながら産卵しています。

彼らを狙っているのがタカの仲間のミサゴ。上空でホバリングしながら、狙いを定めて水に突っ込みます。そして水面で魚をサッとつかんで再び飛び上がります。魚が大きい時はその重さですぐに飛び立てず、水面でしばらく漂っていることもあります。

人も魚を狙います。つかご漁という伝統的な漁法があります。竹でできたつかごと呼ばれる大きな籠を持って浅瀬を歩き回り、産卵している魚の上から籠をかぶせるというシンプルな漁です。かぶせた後に手に伝わってくるゴツゴツという感触がたまらない魅力だそうです。

こうした生き物たちの動きに備えて環境を整えることが、この時季の保全作業の大きな目的です。春分の日には１０００人以上の方が参加して大規模な清掃活動が行われました。また、野火と呼ばれる堤防への火入れ作業を行い、ヨシなどを焼きます。焼くことによってヨシを健全に保全できるのです。

保全と保護は違います。農業や漁業などの人のなりわいとともに自然が維持されてきた伊豆沼では、自然に手をつけないという保護の考え方ではその自然を守ることはできません。沼ではこれからさまざまな保全作業が本格化します。

嶋田哲郎

（河北新報・微風旋風　2015 年 4 月 2 日掲載）